

Title	The Literary Mind : Mark Turner, Oxford University Press, 1996. vii + 168 pp.
Author(s)	櫛和, 千春
Citation	Dynamis : ことばと文化 (1999), 3: 199-202
Issue Date	1999-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/87646
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

The Literary Mind

Mark Turner, Oxford University Press, 1996. vii + 168 pp.

楢和 千春

一般に文学作品とは日常からかけ離れた、特別なものであると考えられている。美しく、新奇な言語表現が散りばめられ、その理解には深い教養や高度な読解力が必要であると思われる。しかし、Turner が本書において強く主張したのは、文学作品の理解と人間が日常行っている思考、たとえば、身の回りの些細な出来事の認識が隔絶しているのではないことである。どちらも人間の持つ基本的な認知能力に基づいて、連続体を成していると彼は考える。この基本的な認知能力を持つ人間の心を Turner は ‘the literary mind’ と呼んでいる。しかし、ここで *literary* という語は通常の用法よりも広い意味を持つことに注意しなければならない。

Turner は近年の認知言語学における成果を援用しつつ、人間が外界の出来事に agent, object, action などから成る、空間における ‘small action stories’ を投影することによって、それらの出来事を認識していると述べる。たとえば、*The wind tore the tree-top down* という言語表現

はなぜ可能なのか。風によって木が倒れるという自然現象に、行為者、行為、行為が及ぶ対象という関係を投影することなくしては、このような言語表現はあり得ない (pp. 30–31)。行為者、行為、行為が及ぶ対象間の関係は人間の抽象化された知識の構造の一部であり、認知科学では通常スキーマと呼ばれている。Turner は、スキーマという専門用語を、より一般的な *story* という語に言い換えることによって、文学と認知科学との間に共通項を見出そうとした。そして、‘story’ を投影することによって事態を認識する人間の心のありようが *literary* なのだと Turner は考えた。

literary という語が通常よりも広い意味で用いられたことは、読者、特に Turner と専門を同じくする英米文学者たちをとまどわせた。Pollard は *Journal of Literary Semantics* に寄せた書評で、Turner の言う人間の認知能力は文学に限らず、あらゆる分野に関わるのだから、あえて *literary* という語を用いる必要はないと述べてい

¹Pollard, Denis E.B. *Journal of Literary Semantics*. vol. 27, no. 2, 1998: 128–129.

る¹。なぜ、Turner は本書を *The Literary Mind* と題したのか。この問いに対する答えとして、Turner が前著 *Reading Minds* で述べているように、現在の英米文学研究が極端に専門化しすぎて、一般の関心から遊離していることに対する彼の懸念が挙げられる。文学作品の世界を理解することと日常の現実世界を理解することとの間にはその本質において何ら違いはない、なぜなら、どちらも ‘story’ として人間は理解しているのであるからという Turner の主張が本書の題に込められている。

しかし、そのことを考慮に入れても、やはり、本書の題は適切ではない。Turner が本書で論じているのは、単に、行為者、行為、行為が及ぶ対象という ‘story’ を構成する要素を投影して行われる事態認識に止まらないからである。本書の真の目的は Turner が Fauconnier と共に提唱しているメンタル・スペース理論に基づく、‘conceptual blending’ という新しい概念体系のモデルの概略を述べることである。‘conceptual blending’ とは、あるメンタル・スペース内の要素が別のメンタル・スペース内の要素へと対応付けられることで、概念が理解されたり、新しい概念が創造されるというモデルである。

Turner がこのモデルを説明するために挙げた例の中に、つぎのようなパズルがある (pp. 72–73)。僧が夜明けに山に登

り始め、夕方、頂上に着く。そこで一晩、修行をした後、つぎの日の夜明けに同じ道を通って山を下り始め、夕方、麓に着く。途中、気ままに休んだりして、歩く速度は不定だったが、ある一地点を前日と同じ時刻に通過していることを証明せよというのである。このパズルを直観的に解く方法がある。最初の日を一つのメンタル・スペースと考え、その中に一人の僧、山の麓から頂上への移動という要素があるとする。同様に、二日目を別のメンタル・スペースと考え、その中に一人の僧、山の頂上から麓への移動という要素があるとする。それぞれのスペースから各要素を三つめのスペースへ入力し、‘blending’ を行う。その結果、‘blending’ が行われたスペースでは、ある一日のうちに、二人の僧がそれぞれ、麓から頂上へ、頂上から麓へ移動したことになる。とすれば、当然、どこかですれ違っているのだから、一人の僧が二日に分けて移動した場合も、移動のコース上で前日と同じ時刻に同じ地点にいたという答えが得られる。

‘conceptual blending’ を概念体系のモデルとして考えた場合、異なるメンタル・スペースにある諸要素がどのように対応付けられるかが問題となる。上の例では、実際は一人しか存在しない僧が異なるメンタル・スペースの中に同時に、また、一つのメンタル・スペースの中に複数、存在することになる。Turner は入力される要素

が存在するスペースや ‘blending’ が行われるスペースの他に、‘generic space’ という抽象化された概念が存在するスペースを想定している。そして、異なるスペースの要素は ‘generic space’ に存在する抽象化された概念を共有することによって対応付けられると述べる (pp. 86–87)。上の例で言えば、‘generic space’ に存在する抽象化された概念の一つに「道に沿って移動している人間」があり、これを共有することによって、それぞれのメンタル・スペースにある僧という要素が対応付けられる。即ち、僧という概念は、異なるメンタル・スペースに分かれて存在する各要素が ‘generic space’ の抽象化された概念を共有することによって対応付けられたネットワークとして認識される。

しかし、本書では、‘conceptual blending’ を想定することの妥当性について説得力のある議論が展開されているとはいえない。‘conceptual blending’ は人間の思考にとって根源的であるのかどうかという大きな疑問が残る。これは人間が思考の過程において、どの程度、‘conceptual blending’ を意識するかということにも関わる。上で述べたパズルの場合は頓智をはたらかせて、意識的に ‘conceptual

blending’ を行わなければならない。だが、人間がある概念を極めて自然に認識する場合でも ‘conceptual blending’ が関わっているのだと Turner は主張する。ただ、その概念の認識が頻繁に行われ、各要素間の対応付けや ‘blending’ の過程があたかも「轍のように刻み込まれている (deeply entrenched)」ために、‘conceptual blending’ は意識されないのだとしている。

このような主張は Lakoff や Johnson 及び Turner 自身が展開してきた、隠喩をある概念領域から他の概念領域への写像とする隠喩論² において成されてきた。隠喩は長らく言語表現のレベルにおける修辞上の問題として取り扱われてきたが、Lakoff & Johnson (1980) を契機に、人間の思考や概念体系に関わる問題として研究されるようになった。言語と思考の関係については、さまざまな議論があり³、言語に観察される事実が即、人間の思考の実質を表すかどうかという問題に決着はついていない。しかし、Lakoff を中心として展開されてきた隠喩の研究では、人間の思考に用いる概念的隠喩を想定することで、個々の言語表現に一貫性のある構造を与えることができた。そして、そ

²以下を参照。

Lakoff, George & Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Univ. of Chicago Press.

Lakoff, George & Mark Turner. 1989. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Univ. of Chicago Press.

Lakoff, George. 1993. “The contemporary theory of metaphor” in Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and Thought: 2nd edn.* Cambridge Univ. Press.

³Katz, Albert N. (et al.) 1998. *Figurative Language and Thought*. Oxford Univ. Press.

のような現象は人間が意識せずに自然に用いている日常言語表現の中に数多く見出され、隠喩が人間の概念体系に「刻み込まれている」ことを強く支持する例証となっている。本書において Turner が ‘conceptual blending’ として取り上げた

例は、上に挙げたパズルのような意識的な思考、及び、文学作品における寓意などが多く、‘conceptual blending’ が概念体系のモデルとして妥当であるという説得力に欠けた。